関西大学国文学会彙報

一、平成30年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

平成30年5月10日(木)　二年次生飛鳥臨地研修
　7月28日(土)　第一回国文学会研究発表会（後掲）
　10月23日(火)～24日(水)　三年次生宿泊セミナー
　　（於 高槻キャンパス高岳館）
　11月29日(木)　院生合同学術研究会
　12月8日(土)　第二回国文学会研究発表会および、
　　山本登朗教授古稀記念特別講演会（後掲）
平成31年1月26日(土)　第一回プレ・ステューデント・プログラム
　3月16日(土)　第二回プレ・ステューデント・プログラム
　3月22日(金)　新二年次生対象専修別履修ガイダンス
　　（国文学会主催ポスターセッション併催）

二、関西大学国文学会研究発表会

◇第一回国文学会研究発表会

日　時　平成三十年七月二十八日(土)午後一時三十分より
会　場　文学部第一学舎　第一号館　A三〇一会議室

研究発表

「国宝『信貴山縁起絵巻』第一巻「山崎長者巻」に関する一考察」
本学大学院博士前期課程　大西　春香

「近世初期にみる漢字字体規範の研究
―「節用集」を資料に―」
本学大学院博士後期課程　徐　茂峰

「類義語との関係から見たコノゴロの変遷」
本学大学院博士後期課程　山際　彰

講　演

「話芸と日常会話の接点」　本学教授　日高　水穂

＊台風12号の接近による暴風警報発令により途中終了。

◇第二回国文学会研究発表会

日　時　平成三十年十二月八日㈯午後一時三十分より

会　場　文学部第一学舎　第一号館　A三〇一会議室

研究発表

「『夜の鶴』最終章段をめぐって」

本学大学院博士後期課程　瀧倉　朋世

「熊野信仰圏の父・母・子
―イザナミ・五衰殿女御譚をめぐって―」

本学大学院博士後期課程　小川　路世

「遠藤周作「砂の城」論
―リルケ「ドゥイノの悲歌」との関わりを中心に―」

本学大学院博士前期課程　板野　楓

「「いちやづけ」の語史」

本学大学院博士後期課程　山口　龍輝

講　演

「伊勢物語と平安貴族の生活―束縛・情熱・憂愁―」

本学教授　山本　登朗

三、関西大学国文学会研究発表会 発表要旨

なお、成稿し、本号に掲載したものについては省略した。

◇第一回国文学会研究発表会（七月二十八日）

研究発表

「国宝『信貴山縁起絵巻』第一巻「山崎長者巻」に関する一考察」

大西　春香

国宝『信貴山縁起絵巻』は十二世紀後半に成立した社寺縁起絵巻の一つである。三巻に仕立てられたこの絵巻には、信貴山中の寺に籠り毘沙門天を勧請して様々な奇瑞を行った、修行僧命蓮（生没年未詳）に関する説話が描かれている。奈良県生駒郡にある信貴山朝護孫子寺が所蔵し、昭和二十六（一九五一）年六月九日に国宝指定された。現在は奈良国立博物館に寄託している。

本発表では、国宝『信貴山縁起絵巻』三巻のうち、主に第一巻「山崎長者巻」を取り上げる。第一巻には、長者が布施を忘れて倉に仕舞い込んでしまった鉢が突然、倉を載せて命蓮の元へ飛んで行き、長者一行が命蓮に倉を返すよう頼むと、命蓮は

倉のみを留め置き、中身の米俵は全て長者宅へ飛ばし返す場面が描かれている。

これを踏まえ、以下の二点について述べる。第一に、三巻仕立ての意義に着目し、とくに第一巻がどのような意義をもつ巻であるのかを考察する。第一巻において、命蓮が倉のみを留め置いたことは、在家である須達長者の寄進譚を先行事例として複数の例を確認したように、在家から命蓮に寄進された堂舎を意味することを指摘する。また、命蓮が長者に米俵を返した理由は、戒律により禁止される食料の備蓄を嫌ったからであり、ここに命蓮の仏教者としての真摯な態度を読み取る。したがって、第一巻は在家の善知識として仏道をすすめる命蓮と、命蓮によって功徳を得る在家を語る一巻であったと解釈できることを指摘する。さらに、第二巻「延喜加持巻」は命蓮による帝の病気平癒を語っていることから、在家の民衆を対象とする命蓮の教化を語った第一巻と、一対となる一巻であると指摘できる。そして、命蓮の姉である尼が登場し、東大寺の盧舎那仏が印象的に描かれる第三巻「尼公巻」においては、仏堂修行者と尼になった女性親族とのエピソードが語られるが、国宝『信貴山縁起絵巻』成立とほぼ同時期、とくにいえば院政期以降に多数作成された、高僧伝との共通性を確認できることを指摘する。

第二に、詞書がまったく伝えられていない第一巻「山崎長者巻」の詞書が、第二巻「延喜加持巻」の詞書冒頭五行に見える点に着目する。第二巻詞書冒頭五行は、明らかに第一巻巻末の内容を示しており、第二巻で語られる内容ではない。なぜそのような詞書が第二巻冒頭に存在するのかは疑問だが、第二巻詞書冒頭五行の存在により、現在は詞書が欠落している第一巻にも、かつては詞書が存在したと考えられることを指摘する。

「近世初期にみる漢字字体規範の研究―「節用集」を資料に―」　徐　茂峰

（本号掲載）

「類義語との関係から見たコノゴロの変遷」　山際　彰

本発表では、上代～近代にわたって近過去を表す語彙の中心的な位置を担ってきたコノゴロについて取り上げ、次の点について述べた。

（一）コノゴロは、使用頻度の高さと使用範囲の広さの点から上代の時点ですでに近過去を表す語彙の中で中心的な位置を占め、それが近代まで続く。

（二）コノゴロは上代から近代にかけて意味・用法に縮小を

見せる。しかし、類義語よりもその変化幅は小さく、時代をまたいで安定して用いられている。

まず、上代～近代における用例調査から、コノゴロは各時代の類義語と比べて多彩なジャンルの資料に用いられ、かつ使用頻度も極めて高い状態が続くことを明らかにした。続いて意味・用法について注目し、それぞれに縮小を見せるものの、その度合いが低いことから類義語が衰退していく中でもコノゴロは使われ続けることを述べた。

意味の面では、古くは近過去（現代の「近頃」「最近」に相当）・近未来（現代の「近いうち」「近日」に相当）・回想現在（現代の「今時分」に相当）の三つの意味が見られたが、近過去が中心であり続けたこと、近未来や回想現在の意味はそれに代わる類義語の出現によって使用されなくなることを述べた。近過去以外の二つの意味は、特に近世以降に激減するが、これには文脈による多義的な解釈よりも一意的な解釈の方が好まれるような、近代における論理的思考の醸成が関わっていると捉えられるものだとした。

用法の面では、先行研究で現代のコノゴロは専ら時間帯を表すとされるが、近代以前にはある一時点をも指し得たこと、しかしその割合は一貫して低いままであることを、類義語であるコノホドやコノヂュウとの比較から明らかにした。また、コノホドやコノヂュウは中世後期～近世にはコノゴロに匹敵するほどの高い使用頻度を誇るが、口頭語的性格が強いために近代には衰退し、漢語語彙に取って代わられることにも言及した。

講　演

「話芸と日常会話の接点」

日高　水穂

江戸落語と上方落語という東西それぞれの寄席空間で育まれた話芸には、それぞれの地域で好まれる笑いのタイプとコミュニケーションスタイルが反映している。

江戸落語の主要キャラクターである与太郎（無知で天真爛漫）、八五郎（そそっかしく早合点、無学だが口達者）、熊五郎（軽薄で向こう見ず）は、同じ演目に共演することはほとんどない。それに対して、上方落語特有のキャラクターである喜六（そそっかしく天真爛漫）と清八（喜六の兄貴分でしっかり者）は、同じ演目にコンビで登場することが多く、あたかも漫才のボケとツッコミのような軽妙な掛け合いを成す。

江戸落語は、強烈な奇人キャラクターが引き起こす奇想天外なストーリーがオチに向かって展開していくのに対し、上方落語は、アホ（ボケ役）とカシコ（ツッコミ役）の掛け合い自体

がおもしろく、会話によるふざけ合いの連続によって展開する。その一例として、江戸落語の「時そば」と上方落語の「時うどん」をみてみる。

江戸落語の「時そば」は、一人目の男とそば屋Aとのやりとり、二人目の男の独言、二人目の男とそば屋Bとのやりとりの三つの場面で展開するが、一人目の男のそば屋をほめあげる口調のなめらかさが聞きどころであり、二人目の男がそば屋をほめようとしてことごとく失敗するのが笑いどころとなる。

上方落語の「時うどん」は、廓のひやかし帰りの二人の男（喜六・清八）のやりとりから始まり、清八とうどん屋Aとのやりとり、喜六・清八のやりとり、喜六とうどん屋Bとのやりとりと展開するなかで、喜六と清八、清八とうどん屋A、喜六とうどん屋Bのやりとりが、ボケ・ツッコミの掛け合いになっており、要所要所に笑いどころが挿入される。

江戸落語の「時そば」は、上方落語の「時うどん」を、三代目柳家小さんが移植したものとされるが、東京の寄席で演じられるにあたり、ボケ・ツッコミの掛け合い芸は省かれ、オチに向かうストーリー展開を聞かせる芸に改められた。

昭和初期に大阪で生まれたしゃべくり漫才が、その後関西の寄席演芸の中心を占めていくのに対し、東京の寄席演芸は現在に至るまで落語が中心である。漫才は、掛け合いの会話を好む大阪の文化的土壌のなかで生み出されたものであるが、それは先行話芸である落語にも認められるものなのである。

◇第二回国文学会研究発表会（十二月二日）

研究発表

「『夜の鶴』最終章段をめぐって」　瀧倉　朋世

（本号掲載）

「熊野信仰圏の父・母・子―イザナミ・五衰殿女御譚をめぐって―」　小川　路世

熊野（紀伊半島南部）とは、海、山、川そして巨石といった自然を対象として発生した信仰圏すなわち聖地である。現在は、熊野三山と総称される三社（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）を拠点とする信仰スポットであると認識されているが、そもそもは、社殿を持たない信仰圏であった可能性が高い。『日本霊異記』ほか、山林修行者たちの行場であったことを伝える文献も少なくなく、その信仰の実態と性格をも推察させる。ただし熊野三山が、一種の宗教的連合体を形成していた

ことを文献に辿れば『為房卿記』を挙げることができる。平安時代後期以降、たびたびに行われた熊野御幸は熊野三山に参詣することを目的としていたと確認されるわけである。そして熊野という聖地は、為政者たちに信仰されただけでなく、日本各地に「熊野神社」と称される神社が勧請されたほか、民衆からも信仰を集めるようになる。室町時代には「蟻の熊野詣」と表現されたように、数多くの人々が参詣に訪れていたことが確認できる。

　そして、熊野信仰を唱導するために、漢文体で表記された縁起だけでなく、仮名を交えて表記されたモノガタリが形成されていく。なかでも熊野本宮大社の縁起を語る『熊野の本地』は室町時代物語の一つとして現在位置づけられているように、奇想天外なストーリーをもって語られている。ただし、『熊野の本地』に語られるストーリーは、熊野三山にほど近い「花の窟神社」にまつわるモノガタリと共通するプロットを指摘できるのである。「花の窟神社」は、『日本書紀』『古事記』に記されるイザナミをめぐる神話世界の舞台であるからだ。

　本発表では、『熊野の本地』と、記紀に記されるイザナミをめぐる諸説とを比較検討することによって、以下の二点について明らかにすることを目的とした。

一、『熊野の本地』と、記紀に記されるイザナミをめぐる諸説とに類似するプロットから、『熊野の本地』が熊野に伝承されていたモノガタリ（イザナミをめぐる諸説）を参照されつつ、神仏習合説を唱導するべく形成されている。

一、『熊野の本地』の形成過程に、イザナミをめぐる諸説が参照されているとすれば、熊野信仰圏として熊野川によって隔てられた地域（「花の窟神社」を含むイザナミを伝承する地域）をも認識されていたことになり、熊野三山に限らず、広域をもって認識されていた可能性がある。

「遠藤周作「砂の城」論―リルケ「ドゥイノの悲歌」との関わりを中心に―」

板野　楓

　これまでの遠藤研究では、作品におけるキリスト教的主題が重要視されており、そのような主題がほとんどあらわれていない作品群は注目されてこなかった。一九七五年発表の「砂の城」もそうした作品群の内の一つである。そこで本発表では、「砂の城」と、遠藤が長年にわたって重要視していた「ドゥイノの悲歌」との関連を指摘し、「砂の城」が遠藤研究において看過できない作品であることを主張した。

　遠藤は一九四七年発表の処女評論「神々と神と」で、自身が

リルケ「ドゥイノの悲歌」から見出したことを中心に論を展開している。のちに、遠藤がこの評論について「私の小説でも中心のテーマとなったものの最初の石」と述べていることから、「ドゥイノの悲歌」は遠藤の作品形成に大きく影響したものと推測される。そして、この「ドゥイノの悲歌」とつながる描写が、「砂の城」には散見される。

本発表ではまず、両作品に描かれる〈樹〉がどちらも〈追憶のモチーフ〉として登場することに注目し、作品間のつながりを指摘した。

そして、「砂の城」の登場人物である泰子とトシの人物像にも、「ドゥイノの悲歌」に描かれる女性たちとの関連が認められる。さらに、泰子がトシの幸福に圧倒される構図と、「ドゥイノの悲歌」に描かれる「立ちのぼる幸福を思っている私たち」が「落ちてゆく幸福」の姿に感動を覚える構図との類似を指摘した。

「砂の城」というタイトルには、トシや西が求めたような〈もろく崩される「美しいもの」や「幸福」〉という意味が内包されている。また、トシや西の姿には、「砂の城」成立時の一九七〇年代に自己犠牲を払ってまで理想を追った若者たちの姿が投影されている。彼らが罪を犯し堕落してまで懸命に求めたものは「美しいもの」や「幸福」であったこと、そして彼らの生き様を認める泰子の姿にこそ、本作の主題があると主張した。

これを踏まえ、「砂の城」は、「ドゥイノの悲歌」に描かれる「落ちてゆく幸福」を、七〇年代の若者たちが追い求めた〈もろく崩される「美しいもの」や「幸福」〉の姿へと発展させた作品であることを考察した。

「「いちゃづけ」の語史」

山口　龍輝

昨今、インターネットの発展やテレビ・SNSなどの普及によって、その時々に起こった新しい事象に関する情報を迅速かつ容易に入手できるようになった。そしてこれらのメディアにおいて、新しい語や既存する語に新たな語義が発生することがあるが、こういったメディアを媒体にして新しい語や語義を生み出す現象は、現代以前にもテレビやSNSではない他のメディアを介しても起こっていた。

本発表は、時代ごとでその時々に起こった事象を一般大衆に広める媒体として〝今を取り上げるメディア〟というものが存在し、それらは各時代において新たな語や語義を発生させる場として機能していたのかを探るとともに、各時代に起こった社会的事象が新語の発生や語義の変化にどのような影響を及ぼす

のかという「語と社会の密接性」について、語の変遷から考察しようとするものである。また本発表では、調査方法として〝今を取り上げるメディア〟として近世期から始まる歌舞伎文化に焦点を当て、そこで用いられていた語「いちやづけ」を例に近世期における歌舞伎の在り方について考察している。また明治期以降のメディアとしては新聞記事や雑誌に中心にその語の用いられ方や近世期以前とのメディア媒体の変化について触れ、辞書・辞典における「いちやづけ」の記載とともに、当時の大衆文化や語の表記や意味・用法の由来のゆれに関して確認し、社会の流れが新用法の発生にどのように影響しているのかを考察した。近現代期ではテレビやインターネットに関して取り上げ、日本社会の意識の変化と連動して、語のイメージや用法を変化させていくことに注目した考察をしている。また、本発表は新語の発生や語義変化などの語学的な観点だけでなく、日本の文化的側面からみた日本社会の在り方にも触れる内容となっている。

講　演

「伊勢物語と平安貴族の生活―束縛・情熱・憂愁―」

山本　登朗

伊勢物語の主人公は色好みとされているが、伊勢物語で「色好み」と呼ばれているのはほとんどが女性であり、そんな「色好み」の女性に、主人公はいつも振り回されている。

伊勢物語には、他の物語には見られない「宮仕へ」という語が頻出する。おそらくは『遊仙窟』などの唐代伝奇小説の影響を受け、伊勢物語の主人公は、多く「宮仕へ」をする官人として描かれているのである。日々の「宮仕へ」は、恋愛や親孝行などの私生活にとって大きな制約である。また、「宮仕へ」は権力争い、出世競争の場でもあり、不本意なことも多く起こる。伊勢物語の多くの段で、主人公たちはそのような不本意や不自由な束縛を一人で嘆いたり、友と嘆きあったりしているのである。

伊勢物語は一方で、いわゆる「東下り」のように、束縛や不本意に堪えきれず脱出を試みる主人公の情熱を描いている。後に「二条の后」となる高貴な家の娘との情熱的な恋、さらには禁断の女性である斎宮との恋なども、世俗の「宮仕へ」体制の束縛からの意図的な逸脱の試みと見ることができる。

そのような情熱的反逆とは違った、憂愁を慰めるための主人公たちの小旅行も、伊勢物語には多く描かれている。その行き先はいつも、難波から摂津にかけての大阪湾沿岸の海辺であっ

た。白砂青松の景色が続いていた大阪の海辺は、伊勢物語では、主人公たち平安貴族が憂愁を慰めるリゾートの地だったのである。

平安時代末期、武将でもあった歌人源頼政（みなもとのよりまさ）は、台頭する平家に対する不満を胸に、しばしば難波にでかけ、自分を伊勢物語の主人公に見立てた歌を友とやりとりしている。頼政だけでなく、百人一首歌人の殷富門院大輔（いんぷもんいんのたいふ）なども、しばしば伊勢物語をまねて難波に出かけ、友と憂愁の歌を詠みあっている。胸の思いに堪えかねた頼政は、後に平氏追討の戦を起こし、戦いに敗れて宇治で自決するが、伊勢物語は、そのような人たちが自身の憂愁を託して読み、共感を込めて追体験するような、そんな物語であった。

伊勢物語の読まれ方に大きな変化がおこり、主人公が好色の権化となってしまうのは、その後、鎌倉時代になってからのことである。

四、平成二十九年度 卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇平成二十九年度 国語国文学専修　卒業論文

〈国文学〉

湯浅　朋美　御伽草子『一寸法師』を読み解く

青野　真衣　「白峯」「仏法僧」からみる上田秋成の趣向

赤阪　共世　韓国ドラマの中の日本
―韓国歴史ドラマの文化優位性を通して―

阿部　彩乃　坊門局と俊成の筆跡の類似性
―『三十六人集』と了佐切『古今和歌集』から探る―

石本　萌梧　鬼のイメージ形成と近世子ども絵本における鬼の受容

井上　彩恵　安部公房『他人の顔』論
―顔の不完全性について―

井上　由菜　赤穂事件
―時代を越えて人気を得た理由―

今西　朱音　『雨月物語』と『英草紙』の比較

井本　真穂　江戸川乱歩パノラマ『パノラマ島綺譚』論
―乱歩の描いたパノラマ島の正体―

岩崎　史佳　木曽義仲の信濃出身家臣団の形成と義仲家臣の掠奪行為
―『平家物語』に書かれていない今井兼平伝承と共に―
上垣　達也　唐物からみる源氏物語
上芝　起也　『今昔物語集』本朝世俗部の笑いについて
上田　鈴奈　「待つ女」と「嫉妬する女」
―一夫一妻多妾の時代を生きた女性たち―
梅谷　翔也　「徒然草序段」の解釈について
遠藤　曹　安部公房『砂の女』論
―仁木にとっての《希望》を中心に―
大野　和輝　江戸の通の扱いの変化
―洒落本を通して考察する―
大元　恒二　百人一首の定家的性格
―藤原公任と比較して―
岡脇　愛　百物語からみる恐怖
―生き物の怪を中心に―
奥苑　涼花　伊坂孝太郎『オーデュボンの祈り』論
―作品に込められた3つの祈り―
小野木京志　『古今和歌集』の構造論
―春の部を中心に―
海藏つぐみ　『吾妻鏡』・『玉葉』における建久年間欠落の理由

梶ヶ山　鼓　川端康成「抒情歌」論
―龍枝が語る「おとぎばなし」を中心に―
加藤安梨沙　『源氏物語』桐壺巻における『長恨歌』引用について
加藤　史華　弁の君
―「源氏物語」の老女房―
金田　章吾　近松世話浄瑠璃における恋愛死
金原　結　『競伊勢物語』
―玉水ヶ淵の湯、春日野小芳の場を中心に―
我那覇　透　谷崎潤一郎『天鵞絨の夢』論
菊谷　真世　安部公房『燃えつきた地図』論
―周囲の人物により変化する「ぼく」の考察―
清松　栞理　とりかへばや物語からジェンダー・コードについて考える
幸田　英明　「みづうみ」論
―銀平のもう一つの自己との対峙―
古賀　玲菜　江戸川乱歩「孤島の鬼」論
―登場人物に身る乱歩の姿―
小森　規子　「桃太郎＝豊臣秀吉説の検討と桃太郎の疑問」
櫻井　瑛佑　坂口安吾「夜長姫と耳男」論
―ヒメの死をめぐって―

佐藤　芽生　『南総里見八犬伝』における「名詮自性」
佐野はづき　『源氏物語』の葵の上
重乃　香穂　村上春樹『ＩＱ８４』論
　　　　　　―作者は何を伝えたかったのか―
芝　祐里香　源氏物語における「宿世」
渋谷　菜摘　枕の種類・歴史と俳諧
白﨑　佳輝　江戸川乱歩『パノラマ島綺譚』論
　　　　　　―「機械」と「肉体」から視るパノラマ島―
杉野　文香　町田康『告白』論
　　　　　　―羊歯と森の小鬼をめぐって
杉山　悠里　『源氏物語』における藤典侍の存在理由
助成　善甫　川端康成『山の音』論
　　　　　　―夫婦の沼と家族の沼―
髙尾　佳歩　伊賀忍者の実像について
高橋　真苗　江戸時代の蕎麦・うどん
　　　　　　―料理書・『蕎麦全書』・『化物大江山』から考察する―
瀧下真莉耶　妖狐譚の形成過程
竹森　大輝　中村文則『掏摸』論
　　　　　　―二人の悪の在り方―
田島　里紗　読者の求めた赤穂事件
　　　　　　―『内侍所』と『赤穂精義三考』の比較から考察する―
立本　純奈　「天正十年安土御献立」事件論
　　　　　　―中世の食文化を通して考察する―
田中　光香　女子教育における紫式部の役割
佃　優希　和歌・俳諧における朝顔・昼顔・夕顔の比較
靹　咲椰香　『枕草子』作品論
　　　　　　―登場人物のキャラクター性について―
苗村真唯子　はやみねかおる『都会のトム＆ソーヤ』論
　　　　　　―Ｒ・ＲＰＧにおける「夢」―
中島　千珠　『源氏物語』における女性の出家について
　　　　　　―紫の上はなぜ出家を願ったのか―
中西　千裕　細川ガラシャ論
中村　未貴　「火車」の変化とその役割
　　　　　　―地獄絵の変遷とともに―
難波里佐子　三島由紀夫『近代能楽集』論
　　　　　　―幻想への引力との関わりについて
橋本　大輝　三島由紀夫『命売ります』論
　　　　　　―幻影が映す冒険世界―
花井　梨香　三島由紀夫『獣の戯れ』論
英　由乃　日本人とお米の関係性について
　　　　　　―江戸時代の料理書を通じて考察する―
廣瀬しほみ　有島武郎「星座」論
　　　　　　―視点人物の成長とランプの役割について―

福田翔太郎　安部晴明について

藤井　綾香　雨月物語の研究「浅茅が宿」・「吉備津の釜」・「蛇性の婬」を通して

藤原　奈々　近代文学における女学生言葉から見る「女学生」の輪郭

古家　拓海　源氏物語草子地研究
—草子地攷における批評の草子地の意義—

前山　日和　『雪国』に見る川端康成の女性像について

増田　愛梨　海幸山幸神話と南洋説話

松尾　香月　藤原定家の字母選択
—今に残る定家自筆の『古今和歌集』からみる—

松田　　達　江戸時代の「お笑い」
—軽口と江戸小咄本の変化を通じて—

松山　哲士　横光利一「日輪」論
—卑弥呼の人物像に関して—

満留　菜月　紫の上の生涯
—女三の宮降嫁から晩年まで—

三登　康弘　豊臣秀吉と能

森　　愛恵　源氏物語における「雨夜の品定め」

森本　利樹　坂口安吾「紫大納言」論
—懊脳と煩悶の末に至った「ふるさと」—

森脇　佳奈　「源氏物語」における美しさを形容することばについて

安田　航平　武者小路実篤『友情』論
—真の勝者は誰か—

矢田貝隆也　織田作之助「雨」論
—子が齎す救い—

山城　絢音　冬の月と「幽玄」
—日本で生まれた美意識—

山原　稚穂　宮沢賢治「ひかりの素足」論
—風の又三郎は死神か—

山本　茄生　寺山修司『田園に死す』論
—回帰の意味をめぐって—

〈国語学〉

池谷　真実　「しんどい」の意味拡張

内田　春子　『小野篁歌字尽』からみる近世における漢字字体意識の変化について

奥山明日香　了承表現の変遷と場面による使い分け

亀岡　聖人　関西方言の語彙に方言性が生まれるまでの過程について

川田　　舞　小学校における敬語表現の習得過程
—大阪市の2校での調査を通して—

酒井　志穂　フィラーとして用いられる「なんか」の使用実態
佐々木悠理　「エモい」の意味の変遷
治村瑠壱子　大蔵虎明本におけるサ行四段活用動詞イ音便とバ行・マ行四段活用動詞ウ音便の使用
田野　茜　日本語中級学習者の運用能力評価基準についての新たなテストプログラム試案
辻　香音　同世代語としての若者言葉の印象と表現効果
中川　悠咲　「動詞現在形＋がいい」の使用の変遷について
西田あおい　明治期からの語彙の変遷
牧　直昂　落語における八五郎と熊五郎の役割について
松井美奈子　関西方言の接続助詞「カテ」の使用の変遷
—「テモ」「トテ」「タッテ」の比較から—
南　晃太郎　ウルトラシリーズの役割語の変遷と怪獣・宇宙人のネーミングの傾向
八坂　尚美　禁止の終助詞「—そ」
—室町期における使用状況および近世上方の連用形禁止法について—
山本　諒介　トレーディング・カード・ゲームで考える「解釈に違いが生まれにくい文章」

◇平成二十九年九月期　修士（文学）取得論文

〈国語学〉

奇　東眩　『万葉集』に於ける「所」字の訓読研究

◇平成三十年三月期　修士（文学）取得論文

〈国文学〉

小川　路世　熊野における女人教化に関する研究
流石　栄里　『堤中納言物語』における童
—その役割に着目して—
朱　クンジ　平安和歌における表現・田作歌の表現
—曾禰好忠集を中心に—
古谷友香里　『とはずがたり』研究
—その独自性—
吉永　栄子　『宇治拾遺物語』に登場する稚児
鷲尾亜莉沙　廣瀬本万葉集の仮名遣いについて

〈国語学〉

陳　会敏　現代日本語におけるカタカナ表記語の研究
藏本　真由　現代語にみられる認識的モダリティ表現
—「気がする」「感じがする」を中心に—

大久保北斗　「べきだ」の派生文法形式の意味記述
山口　翔平　日本語の表記と意味
―動詞「さす」と「しあい（試合）」を例に―

◇平成二十九年九月期　博士（文学）取得論文

〈国文学〉
平田恵美子　広津柳浪「深刻小説」について
―『変目伝』、『黒蜥蜴』、『亀さん』、『今戸心中』、『河内屋』、『浅瀬の波』、『雨』における江戸文学とのかかわり―